
怪盗ジーク―闇を駆ける者―

針井 龍郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗ジーク―闇を駆ける者―

【Nコード】

N4607C

【作者名】

針井 龍郎

【あらすじ】

金と女と涙に弱い、その名も高き『怪盗ジーク』。彼の所にやってきたのはなんと、十代中頃の可憐な少女だった。依頼の品とはいったい……？「金さえあれば何でもござれ。盗んでご覧に入れましょう！」

プロローグ

ジリリリリリリ……………

深夜の美術館に警報装置のベルが鳴り響く。警戒していた多数の警察官が一気に色めき立つ。

「侵入者だ！ 予告通りヤツが来たぞ！ 今度こそ取り逃がすな！」

けたたましい音を立てて防火壁が次々と閉まってゆき、侵入者の脱走を妨げようとする。1枚3メートルという鉄の板だ。どうやって人間の力で持ち上がる訳がない。

「スミス警部、全館封鎖完了いたしました。ネズミ1匹逃げでるすき間もありません」

1人の警官が大柄な男に報告する。スミスと呼ばれた男はその報告にうなずいた。

「うむ、ご苦労だった。しかし相手はあのクソ野郎だ。ゆめゆめ油断するなよ」

「はっ、了解しました。失礼します」

警官は敬礼をして、スミスから離れて行こうとした。

「ちょっとまで。」

突然スミスに呼び止められて、警官はわずかながらびくつと反応

した。いつの間にか、スミスの片手は警官の右肩の上にのせられている。

「おいおい、どこに行こうと言っただ？ そっちにはお前は行ってはいけないはずだぜ……？」

久しぶりだな、ジーク」

「い、いったい何の事でしょうか？ ジークと言われても私にはさっぱり……わ、悪い冗談はよしてくださいよ、まったく。ははは……」

スミスに肩をつかまれたまま、警官はじりじりと後退する。顔は笑っているが、その笑い声は明らかにかすれていた。

「ふん、往生際が悪いぞ、ジーク。なるほど、上手く化けたもんだが俺に通用するものか。盗人には盗人の臭いってもんがあるんだよ。さて、今日こそ年貢の納め時ってやつだ。観念かんねんしやがれっ！」

甲高い金属音とともに、ジークの両手に手錠がかけられた。

「あっちゃあ……。ばれとったんか。今回の変装は上手いこといったから、スミスのおっさんからかって行こ思とったんやけど……それにしてもクソ野郎とは心外やなあ。俺とおっさんとの仲やのに……」

手錠をかけられたのにも関わらず、ジークは相変わらずひょうひょうとしている。

「ぐふふ……。ジーク、もう終わりだ。おとなしく逮捕されろ」

「悪い、スミスのおっさん。今日はかまってやれる時間はあいにくないんや。俺にも都合つてもんがあるさかいな」

ジークはしゅたつと右手を挙げると、さっそうと走っていった。いつの間にか手錠は外れていた。

「ぐぬぬ……、ジーク！いつの間に手錠を外しやがった！？
今日こそは逃がさんっ！まてえっ！？どわあっ！」

ジークを追って走りだそうとしたスミス警部はいきなりもんどりうって倒れた。いつの間にか、両足首にジークにかけていたはずの手錠がかかっている。

「じゃあな、スミスのおっさん！」

「まてえっ！！ジークッ！！」

後ろでうなっているスミスをしり目に、ジークは廊下を走った。走りながら、ジークは顔に手をかけてマスクを剥ぎ取った。前方に黒ずくめの女性が立っている。背中に少し大きめの四角い荷物を背負っていた。

「悪い、待たせたなレイ」

「まったくよ、捕まったんじゃないかって心配したんだから。ま、あなたに限ってそんなことはないでしょうけどね」

ジークが声をかけたその女性は、切れ長の目に流れるような黒髪を持つ美女だった。ジークはそれに苦笑いで答えた。

「スミスのおっさんとゴタゴタしとってな。まあ細かいことは後回しや。盗るもんは盗ったか？」

「モチロン♪」

ジークが囷おとりになった隙にレイがしっかりと働いていたようだ。

「そーか、ほな脱出や。レイ、しっかりついてこいよ」

ジークは窓ガラスを突き破って外に飛び出した。ガラスの破片がライトに照らされ、キラキラと光り輝く。ちなみに言っておくと、ここは5階である。その後レイと呼ばれた女性も続く。2人は空中で小型ハンググライダーを背中に展開させると、宙を滑空した。

照明に下から照らされて、2人の影が夜空に黒く浮かび上がる。後ろを振り向くと、スミス警部が手を振り上げて何かを叫んでいる。

「じゃあな！！『ルノールの泉』はもらっていくでえ！！」

大勢の警官たちを尻目に、2人の影はあっという間に夜空のかなたに消えていった。

依頼人の少女

ここはとある町外れの軒家^{いっけんや}。そこには病に倒れた父親を世話する、美しい娘さんがいて……。

という話ではもちろんない。何を隠そう、ここが知る人ぞ知る『怪盗ジーク』の隠れ家なのだ。2人には、養っていくことを条件にかくまってもらっている。

居間の本棚を横にずらすと、ぽつかりと地下への階段が通じている。なぜ、天下の大泥棒がわざわざかくまってもらっているのか？ それには井戸よりも深い（？）理由があった。

彼の稼業は『泥棒』だが、なんでもかんでも盗むわけではない。そりゃあ彼自身の趣味で盗むことが多いのだが、依頼主に頼まれての仕事も実際少くない。だいたいは、依頼主が盗まれた物を取り返すという仕事であるが、たまに盗み以外にスパイまがいのこともさせられる。完全なまでの秘密主義と異常なまでの任務成功率の賜^{たま}物^{もの}である。さすがに国際的な物には手を出さないが。

『そんな生業^{なりわい}なのに、うろろろばかりしとつたら依頼がこーへんやないか。俺だけでも盗みはできるけど、現金盗むわけやないから生活していかれへん。銀行に盗みに入るなんか簡単やけど、そんな大泥棒のすることやないやろ？』

以上が怪盗ジークの言い分である。そう言うことで、この家に居候^{いそ}になつてゐるのだ。居候も大泥棒のすることじゃないような気がするが……。

とりあえずそんなわけで、金と女と涙に弱い『怪盗ジーク』は、相棒の女性レイとともに、日々盗みに依頼と、忙しくしているわけだ。

その日も依頼人はやってきた。普通、依頼人は家主の女の子、ナンシーが警官と関係がないかどうか見極めてから、本棚の裏側に連れて入ってくる。しかし、その日は少しばかり勝手が違った。相手は依頼人のはずなのに、なかなか降りてこないのだ。しびれを切らしてレイが様子を見に行った。

「ナンシー、何してるの？依頼人さんなんですよ？」

「あ、レイさん。それが……その……」

口ごもるナンシーの陰から、16、7歳くらいの女の子がひよいと顔を出した。きれいな、よく澄んだ瞳をしていた。

「あの……、あなたが『怪盗ジーク』の相棒さんですよ。噂は聞いております。今回は仕事の依頼に来ました。盗まれた物を取り返してもらいたいんです。お金ならいくらでも差上げます。お願いします」

その少女はぺこりと頭を下げた。

（なるほど、ナンシーがなかなか連れてこないわけね。すこし若すぎるわね。でも、目を見る限り嘘ついてるようにはみえないけど……）

「分かったわ。ついておいで。仕事を受けるかどうかは話を聞くまで決められないけど、なんか大変みたいだしジークには会わせない

とね」

レイが本棚に向かって歩いていくと、ナンシーが追ってきてこっそりと耳打ちした。

「いいんですか、レイさん？いくらなんでも若すぎますよ。あんな年齢でジークさんの隠れ家を知っているのって不自然じゃないですか？」

「大丈夫、なにがあつたかは知らないけど、彼女は嘘はついていない。目を見たら分かるもの。信じてあげて」

ナンシーはまだ何か言いたげだったが、しぶしぶ引き下がった。

例の本棚の前に着くと、レイはいつものように地下への階段をあらわにした。少女は目を丸くして驚いている。レイはそれを横目にみてほえんだ。

階段を下つていくと、さすがに気になったのか、ジークが様子を見に上がってこようとしていた。彼もまた、少女の若さに驚いたようだったが、すぐに真面目な顔に戻った。

「初めましてお嬢さん。ジーク＝ラントシュタイナーです。依頼人の方ですね。奥へどうぞ」

ジークは少女を奥にあるいすに座らせると、机をはさんで自分も座り、机にひじをついた。

「さて、お嬢さん。盗みの依頼と言つことらしいんやけど。内容はどつという物なんやるか？」

ジークの黒く澄んだ瞳に見つめられても、少女は目をそらさずにじっと見つめたままにいる。少女はゆっくり口を開いた。

「ある機密文書を取り返してほしいのです。うまく使えば素晴らしい発見もできるのですが、それが悪意をもって使われるとなると、いったいどういう事になるのか想像もつきません。

お金ならいくらでも差し上げます。勝手な願いであるとは重々承知しております。お願いします。世界を救ってください」

黙って少女の話を聞いていたジークだったが、話が途切れると唐突に口を開いた。

「失礼やけど、お名前聞かせてもろてもええやろか。まだ聞いてなかったやんね？」

「あ、これは失礼しました。そういえばまだ名乗ってませんでしたね。

「ジャネット＝アクセルロッドと申します」

それを聞いて、ジークの隣に座って話を聞いていたレイは息をのんだ。

「ジャネット＝アクセルロッドって、史上最年少で国家物理学者になったって言う、あの……？」

ジャネットと名乗った少女は恥ずかしそうにうなずいた。

「やはりそうか。一目見てからもしかすると……とは思っていたんやけど。やっぱりアクセルロッドさんやったか。

ん、待てよ。つーことは、機密文書つてのは最近になって発明されたって聞く……」

「はい、『そりゅうじぶんかいこうはっせいそうち素粒子分解光発生装置』の設計図の事です」

「そうか……」

ジークはそれを聞くと、うつむいて黙り込んでしまった。

「素粒子分解光発生装置って？」

レイがジャネットの方に身を乗り出す。

「物質はみな原子からできてるのはご存知ですよ。先ほど言った光を物質に当てると、その光のエネルギー波によって原子よりもっと小さな単位である素粒子まで分解されてしまふんです。

もともとそれは研究のために発明された物ですが、ある時軍部に目をつけられまして。研究者たちの反対を無視して、その原理を兵器に応用させるつもりなんです」

「それって、つまり人間がこなごなになっちゃうってこと？」

ジャネットはコクリとうなずいた。レイの顔が青白くなる。

「そんな……むちゃくちゃだわ」

「その通りです。しかし私が政府に掛け合っても、政府はその計画についてまったく関係していないと言い張ります。軍部は昔から研究者とは仲が悪く、一応説得を試みたもののまったく相手にされず……。」

設計図は今のところ軍部が管理しています。兵器開発が始まるのは明後日の正午からです。設計図さえ取り戻せば開発は進みません」

「でも設計図をコピーしとったら、たかだか設計図1枚盗んだからって意味ないんと違う？」

ジークの言葉にジャネットは首を振る。

「その点は大丈夫です。悪用を防ぐために、設計図はコピーなどができるようにプログラムされているんです。設計図さえ手に入れてこちらで処分してしまえば、向こうにはいっさい手出しできません。もともと非公開の情報ですので、ジークさんも仕事がすみさえすれば警察沙汰になることはありませんし。」

お願いします。開発に携わった者がいまさらこんなことを言うのもおこがましいですが、世界を魔の手から救ってください!!」

「……無理やな」

「!!ちょっとジーク!!いくらなんでもそれは……」

即座に断ったジークにレイが反論する。ジャネットはジークの一言で固まったままだ。

「……それはなぜですか？」

ようやくわれに返ったジャネットがゆっくり口を開いた。

「俺は今まで国際関係とか、国家のことに關してはまったく手を出さなかった。そこところはレイも分かってくれてる。何でやと思う？」

俺はな、一介の人間は世界には手を出したらいかんと思ってる。それで世界が狂ってまうからや。お天道様に顔向けでけん泥棒の俺やったらなおさらや。あんたとは違ってな」

ジークの言葉にジャネットはうつむく。それをみて何か言おうとしたレイを目線だけで黙らせ、ジークはさらに続けた。

「ただ、俺にどうしても頼みたいってんなら条件がひとつあるんや」

「なんですか。私にできる事なら何だってやります！」

ジャネットの発言に顔をほころばせてジークは話を続けた。レイはとなりではらはらしながら2人のやり取りを眺めている。

「あんたが俺に依頼するんやない。いや、そうやないな……。昔から言いたいことがまとめられへんのが俺の悪い癖や。

あー、あんたが俺に盗んでくれって依頼するんやない。それやったら俺には手出しでけん。理由はさっき言ったとおりや。だから、あんたは俺にこう言うんや。

盗みたい物がある。手えくんで一緒にやらんかってな」

「……！はい、それでよろしいのであればお願いします！！」

ジャネットはジークの提案に目を輝かせた。しかし、やる気十分のジャネットとは対照的に、レイは不満そうだ。

「ちょっとジーク！それ本気なの？彼女は国家物理学者なのよ？私たちみたいなのと会ってるってだけで資格剥奪ものなのに、これ以上つき合わせてなんになるって言うの？冗談じゃないわ」

しかし、ジークはニヤリと笑って言い放った。

「よう言った。やっぱ、依頼するくらいやったらこんくらいの覚悟は持つといってもらわんな。安心せいや、レイ。俺をなんやと思つとるんや。天下の大泥棒、『怪盗ジーク』なんやで？ ジャネットちゃんには指一本触れさせへんわ！！」

ジークという人

「ねえ、ジーク。あの娘に言ったこと、まさか本気じゃあないでしょうね？」

ジャネットが引き上げていった後、机に座ってコンピューターを操作していたジークにレイは声をかけた。どことなくトゲのある言い方である。

「アホなこと言いなさんなや。俺はいつでも本気やて。俺が仕事のことと冗談言ったの聞いたことあるか？」

「ないわね……。ま、あなたの事ですからちゃんと作戦くらい考えてあるんでしょうけど？どうなの？」

レイは重ねてたたみかける。素人を盗みに連れていくなんて、馬鹿げているとしか言いようがない。ましてや、今回は国家が相手なのだ、冗談ではすまされない。自然と言葉にも熱が入る。

「作戦なんかあれへんて。普段通り、予告状叩きつけて正面突破や。それが一番やろ」

「は……！？」

カラカラと笑いながら、ジークはさらつと言つてのけた。レイの額に青筋が浮かんでいるのさえ気づかずに。

「こう言うのは、堂々で行ったらいいんや。盗られたもんを盗り返すだけやろ？なにを隠れる必要がある？『正義の御旗は此処にあり』」

！』つてな」

どこで知ったのか、『ジパング』で使われている言い回しで言葉を締めくくり、そして笑った。まるで、居酒屋にでもいるような酔っ払った中年男だ。困ったものである。

ひとしきり笑った後、ジークは再びパソコンに向き直った。

「へえ……、作戦無しねえ……。国営の施設に真っ正面から……。ええ度胸やないの……」

レイの声が震えた。爆発を必死で抑え込んでいるかのように、拳を体の両脇で小刻みに震わせている。

ここでようやくジークは異変に気づいた。まったく、救いような鈍さである。ジークは一瞬間凍りつき、おそろおそろレイの立っていた方向に顔を向けた。

「ぎひやつ！」

鋭利な投げナイフが顔の横すれすれをかすめ、ジークは思わず情けない悲鳴を上げた。ナイフは鋭い音を立て、ジークの背後の壁に見事に突き刺さった。

「ぐべっ！」

壁に刺さったナイフの方に気をとられていると、今度は水の入った丸い大きな花瓶がジークの側頭部を直撃した。花瓶は辺りに水をぶちまけ、粉々に砕け散った。

「ちょい待ち、落ち着けて！うわわ、あかんあかん。さすがの俺でも肉切り包丁で刺されたら死んでまうって！」

「だまらっしゃい！あんたなんか勝手に捕まって殺されたらええんや！」

「わ、わ、ちよつとたんま！口調変わってもうてるって！うひゃっ！」

ジークは慌てて飛び上がった。今までジークの右足があった場所に、レイが投げた刃渡り二十五センチメートルの肉切り包丁が鈍い音を立てて突き刺さり、不気味に振動している。

「うるさい、うるさい！もうあんたなんか知らんっ！」

レイはそう叫んで、傍らにあった木製の机に左拳を叩きつけた。机は真ん中あたりでぱっくりと折れてしまった。恐ろしいほどの馬鹿力である。ジークの顔が一瞬にして青ざめる。

「わ、悪い！俺ちょいと用事思い出したから留守番頼むわっ！んじゃな！今日中には戻ると思うけど、帰らんかって心配すんなやっ！」

壁をかけた反動で一瞬のうちにレイの頭上を飛び越えたと、レイが声を掛ける暇すらない内に、ジークは地上に続く階段を四段抜かしで駆け上がった。いった。

「待てっ！こら、ジークっ！」

「悪い！堪忍なあゝ」

一言、遠くの方から聞こえたかと思うと、すぐに気配はなくなっていました。

レイは腹立ち紛れに、先ほど自ら叩き割ってしまった机のそばに転がっている椅子をかけた。椅子は壁にぶつかって碎けた。

「くっそ、ジークめえ……。帰ってきたらとっちめてやるんだから！」

「ご乱心ですね、レイさん」

レイが声のした方に振り向くと、戸口の所にナンシーが微笑みながら立っていた。

「あ、ナンシー？いつからそこにいたのっ！？」

レイは少しばかり慌てた。そりゃあ、椅子を蹴り飛ばした所を見られたくない。仮にも（？）うら若き乙女なのだから。

「今来たところですよ。下の方が騒がしいと思ったら、ジークさんが行き先も告げずに慌てて飛び出して行くんですもん。気になって様子を見に来たんです。

でも、すごい状況ですねえ。また喧嘩したんですか？ま、いつもの事ですけど」

ナンシーは部屋の有り様を見回しながら尋ねる。レイは第三者の立場から言われたからだろうが、少しばかり冷静になったようで、自分のした行動の結果を改めて目にして赤面していた。

「ええ、今回の依頼人の女の子の事でね。意見が食い違ったって言うか、ジークがあまりに適當すぎるからつい……」

「大丈夫ですよ、レイさん。あの人ならきつと心配いりません。私たち親子も、あの人のおかげで今こうしていられるんですから。世間ではとんでもない盗人ぬすこだと、特に金持ち連中には蔑さげすまれてますけど、あの人は何時だって弱い人の味方ですよ」

足元に転がっていた椅子を起こして、それに腰掛けながらナンシーはそう言った。その言葉を聞いて、レイはそつと微笑んだ。

「そうよね……。言われてみれば、初めて会った頃から、ジークは少しも変わってないわね。いつも適當で、そのくせ仕事だけはきちりこなして、いつでも弱い者の味方で……」

ナンシー、ありがと。気分よくなったわ。さて、ジークにご飯でも用意していきましょうか」

「あ、私も手伝います！」

レイは吹っ切れたような笑顔で階段を上っていった。ナンシーも慌ててその後を追った。

ジークという人（後書き）

更新遅くなりました！針井龍郎はまだ健在です！これからもよろしく願いますっ！

裏世界（アンダーグラウンド）での密会

レイがナンシーの尽力によって、恐るべき早さで機嫌を直していったちょうどその頃。ジークはある人物との接触を試みて、街の住宅街の裏通りの奥の方まで足を運んでいた。黒いロングコート（ひるがえ）を翻し、細く薄暗い路地を進んでゆく。

用事があるというのは、レイから逃げるためのただのでまかせではなかったのだ。まあ実際、そういう理由も多少は含まれてあるのだが。

しかし、周りのおんぼろアパートに日を遮られて昼間でさえ薄暗いそこは、アンダーグラウンド——裏社会の住人の住処（すみか）となっていて、町の人はおるか、アパートの住人達も立ち入らない場所となっていた。

国が定めた法律など何の役にも立たない、そんな場所にある唯一の掟（おきて）。それは『自分の身は自分で守ること』。銃弾が飛び交うことなど日常茶飯事のこの空間では、『誰にやられた、だからアイツは悪だ』（あく）などというセリフは戯言（たわごと）にしかない。身を守れなかった自分が悪いのだ。

かつてはレイもこの世界の住人であった。ジークと初めて出会ったのもここだった。彼女も女怪盗として名を馳せた人物だったのだ。

さて。彼女の話は置いておく事にして、ジークに焦点を戻そう。

彼は何にも気にせず歩いているが、アパートに挟まれた路地には生ゴミや粗大ゴミが散らかったままで、不衛生極まりない。町中で

あるにもかかわらず治安の悪いその地域には、アパートの住人ですら近づくこともなく、今も真つ昼間だというのに人影はほとんど見かけられない。たまに居たとしても目つきの悪いだけの、見かけ倒しの連中ばかり。ジークはそんな奴らに目もくれず、スタスタ歩いてゆく。彼らも、ジークを一瞥いちべつしただけで自分との実力差を感じ取り、手を出そうともしないのだ。

十分くらいたった頃だろうか、ジークはとある廃ビルの裏口に足を止めた。壊れた洗濯機や、ドアの取れた冷蔵庫、その他もろもろのガラクタの中に、ボロをまとった老人が一人、段ボール箱の上に腰掛けていた。

彼はジークの気配に気づくと、俯いていた顔をすっと上げた。煤すすや埃ほこりで黒くなった顔だが、目だけは爛々らんらんと鋭い光を放っている。

「珍しいもんじゃな。おぬしがここへ再び現れようとは。五年前じやったかのう。フリリとやってきたおぬしが、レイを此処アンダーグラウンドから連れ出したのは」

「そないに前になるんやっけか？にしても、ダンさんもあんまり変わつとらんやないか」

その老人——ダンは、ジークの言葉に声を出さずに笑った。

「簡単にくたばるわけにはいかんじゃろ。ここにはまだわしを必要とする者があるからの。おぬしも含めてな。」

で、今日は何のようじゃ？わざわざわしの所へ来るといふ事は、大仕事が控えておるのか？」

「まあ、そんなところや。かなり難しい仕事やから、できる限りの準備を頼みたい」

ジークは、着ていたロングコートの内ポケットから回転式拳銃リボルバーを取り出し、ダンの前に置いた。黒く鈍い輝きを放つそれは、威厳すら感じさせる。

「ふうむ。Smith & Wesson Model 686。『dis-
taininguish^{ディスティンクイッシュ}ed combat magnum^{コンバットマグナム}』か。4
インチモデル……、ん？シリンダーに細工してあるな。見事な技じ
や。誰がやった？まさかおぬしではあるまい」

「ちやうちやう。これは俺のやない。俺のはこつちや」

ズボンの尻ポケットの方に手を回し、今度は少し小型の回転式拳銃リボルバーを取り出した。ダンの表情が明るくなる。

銀色だが、非反射加工を施したボディは華美に感じさせない。すらりと伸びた銃身には、アクセントとして一筋の黒いラインが走っている。均整のとれた美しいフォルムは、さながら鞘から抜き放たれた刃の切っ先のようなだ。

「おお、こいつはわしが作ったヤツじゃ。懐かしいのう。」

三十八口径で装弾数が六、飛距離が五十m。おぬしの言うとおり
の改造をシリンダーに施すのが、一番骨が折れたんじゃ。Siege
スペシャル
Specialとでも名付けたんだっけか？当時としては会心の
できじゃな。

手入れもよくされておるのお。しかし、血の匂いが全くしないのはどういう訳じゃ？まさか、一度も人を撃っておらんのか？」

ジークは寂しそうに笑うだけだった。ダンはそんなジークを見て、すぐさま顔を俯け、Siegel Specialに目を向けた。

「すまなんだな、野暮な質問しちまって。ま、たいしたもんじゃよ。己の正義を貫けるというのは」

「謝ることはないやろ。シリンダーの改造も、実際はそのためなんやからな。俺は何があっても人殺しだけはしたないんや」

ジークの言葉を聞いて、ダンは今度は笑い出した。

「甘いヤツじゃな、おぬしも。まあ、そこが気に入ってコイツを作ることを引き受けたんじゃったかな。

さてと……。用事はこいつの整備だけか？」

ダンの声にふと我に返ったジークは、激しく首を横に振った。

「ちやうちやう、俺が今日此処に来たんは人に会ったためなんや。もちろん、整備もよろしく頼むけど……。

会いに来たんは、その銃の持ち主や」

ジークは黒光りするマグナムに目をやった。ダンが眉をひそめた。

「まさか、その銃はアイツの銃か？」

ジークは黙ってうなずく。

「そうか……。どおりで腕のいい改造なわけだ。しかし、アイツの助けが要となると、今回の仕事は相当危ないようじゃな」

ダンが神妙な面持ちでつぶやく。そして、つと顔を上げて言った。

「よかるう。その冷蔵庫の下に隠し階段がある。もっともおぬしは知っているはずじゃがな。今の時間なら寝ておるんじゃないかなろうか。会いに行ってみなさい。」

それで、コイツの整備じゃが半日はかかりそうじゃ。それまでコイツでも持っておけ」

ダンはジークに、手のひらに収まる程度の小型の自動式拳銃オートマチックを放り投げた。片手で軽く受け止めたジークは、ダンにニヤリと笑いかけた。そして、ポケットに受け取った拳銃をねじ込むと、冷蔵庫の下に隠された階段を、黒いコートをひるがえしながら下っていった。

裏世界（アンダーグラウンド）での密会（後書き）

お久しぶりです。センター試験まであと一ヶ月とちよつと。焦りっぱなしの針井龍郎です。

焦ってんならこんな事してる場合とちやうやろつて言う突っ込みはさて置き……（オイ）。いよいよ年の瀬が迫って参りました。皆さんいかがお過ごしでしょうか？お忙しいとは思いますが、健やかに新年を迎えられますよう、心よりお祈りいたします（なんか言い方変ですかね？）。

何はともあれ、長期の中断もありましたが（てか、中断しすぎ……）、この話も作者の中では終わりが見えてきました。なんとか完結出来そうです。年内にも、第五話を投稿予定です。そしてその次は新年特大号（未定）。まだまだ見せ場はこれからなんで、是非楽しみにしていただきたいと思います。あ、もちろん「天馬」の方もいずれ更新しますので、のんびりとおまちください。

では、また次回でお会いしましょう。以上、針井龍郎でした！

三人の女達

秋の木漏れ日の中、一人の女性が噴水の前で立っていた。少しばかり幼さの残る、少女のようなあどけない顔立ち。しかし、澄みきったきれいな瞳は、純粹さの中に意志の強さを感じさせる。

清楚ではあるものの、彼女の魅力を引き出すのに十分な黒いツーピース。胸元から覗く白いブラウスが目に眩しく映る。

なんの変哲も感じさせない彼女こそが、今回のジークの依頼主、最年少国家物理学者のジャネット・アクセルロッドその人である。彼女は今朝早くに、午後三時ごろ緑地公園内の噴水前で待つようにと書かれた手紙を受け取ったのだ。差出人の名前はジーク。いよいよ計画が始まるらしい。

しかし、約束の時間を過ぎても例の二人とおぼしき人物は現れない。先ほどからジャネットの頭の中には、よからぬ考えばかりが浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返していた。それもそのはず、この辺り一帯は防犯対策が万全と言うことで有名で、二分ごとに一回は制服警官が目の前を通り過ぎると言っただけなのだった。

つと彼女は顔を上げた。肩に掛けたバッグから携帯電話を取り出し、通話ボタンを押した。電話がかかってきたようだ。

「もしもし。あ、はい。私です。向かいのビルですか？七階ですね？わかりました、すぐ行きます」

ジャネットは携帯を元どおりカバンにしまうと、小走りで道路を挟んだ向かいのビルに入っていた。

自動ドアをくぐって中に入る。ロビーは豪華とは言えないまでも、全体的に清潔感が漂い、優美な印象を与える。彼女は一通り周りを見回してから、エレベーターに乗り込んだ。

ジークが指定した七階は最上階で、スカイ・レストランになっていた。ジャネットはウェイトレスに断って中に入った。一通り見回すと、見覚えのある女性が、見知らぬ女性と二人で窓際の席に座っていた。

「こんにちは、レイさん」

「こんにちは。それと、出来たら此処ではエリって呼んでくれる？」

レイはそつと微笑みながらジャネットに話しかけた。艶つややかな黒髪を首もとでねじ上げている。金のネックレスを首もとに輝かせ、黒いワンピースを身にまとったその姿は、見る者全てを魅了する。

「はい、すみません、エリさん。あの……、ところでこちらの方はどなたでしょうか？」

ジャネットはそう言って、傍らの女性に目を向けた。

レイよりも小柄だが、ジャネットよりも少しばかり背が高い。透き通るような金髪をポニーテールにして、背中に流している。すっきりした鼻すじ、パツチリと開いた輝くばかりの黒い瞳。赤くみずみずしい唇。さらに、雪のように白い、なめらかな肌。

耳元には華美に感じさせないほどのイヤリングをつけ、おとなしめの青いワンピースを身にまとった様子は、どこかのご令嬢のよう

だ。同性であるはずのジャネットまで、ほれぼれするほどの美女である。彼女に見とれて、ジャネットの思考はしばらく止まってしまった。

そんな彼女の様子を見て、その女性のみならずレイまでも笑いをこらえている。

「くくくつ……、あなたも一度会ったことがあるはずよ。よく顔を見て思い出してみて？」

ジャネットはもう一度、じつくりと女性の顔を観察した。その時、彼女の瞳に少年のようなイタズラな光が宿った。

「っ！？……もしかして、あなたは……」

女性はゆっくりとジャネットの耳に口を近づけて言った。

「御名答、久しぶりやな、ジャネットちゃん」

ジャネットは驚きのあまり飛び上がった。なにしろ、目もくらまんばかりのお嬢様が、いきなり男性の声でしゃべり出すのだ！驚かない方がどうかしてる。いや、いろんな意味で危ないだろ、そんなヤツ。

「ジ、ジジジクさんっ！？何やってるんですか、そんな格好でっ！？」

ジークはにっこりと微笑み、今度は完全に少女の、鈴の鳴るような声で答える。

「何って……、変装に決まってるじゃない。そんなわかりきった事聞かないでよ？それから、今はランでお願いね」

小首をかしげて言うジーク。笑顔がきらめく。本性が男とわかっていても、恐るべき破壊力だ。男なら、どんなヤツでも完璧に撃ち落されただろう。これが男だとは思えない。と言うより、むしろ女にしか見えない。ジャネットは首の後ろまで真っ赤っかになってしまった。

「こら、ランちゃん。調子に乗っちゃダメじゃない。ジャネットちゃん、恥ずかしがり屋なんだから」

「ごめんなさい、レイさん」

今はランよりもエリの方が年上という設定らしい。ジャネットは恥ずかしさのあまり、ますます赤くなっていく。そんな彼女を、二人は愛おしそうに、生暖かい目で見つめていた。

「さあさ、そんなところで赤くなってないで、とりあえずこっちに座りなさいな」

レイ——もといエリは、ショックから未だ立ち直れないでいるジャネットに声を掛けた。二人とも、ジャネットをわざわざからかいに来たのではないのである。

おそろおそろ、ジャネットがジーク——もといランの隣に座る。ランから漂ってくる、女性としか思えない甘い香りがジャネットの鼻腔をくすぐり、彼女の思考をいけない方向へと導く。

ジャネットは慌てて首を振り、危ない妄想を振り切った。

「ここに来てもらったのは言うまでもなく、今晚決行の作戦についてよ。さあて、この場にいるのはランちゃんと私だけだから、私が説明していくわね？」

作戦会議

七階のスカイ・レストランの一角に、三人の女性の姿があった。平日の午後三時を過ぎたころということもあり、彼女達の周りには少し離れた所にビジネスマンスタイルの男性が一人で座っているくらいだ。

彼女達は額を突き合わせて、何やら熱心に話し込んでいる。どこからどう見ても女性にしか見えない三人組。しかし、何を隠そう彼女達は——いや、彼女達と彼と言うべきだろう——読者様のご察しの通りジークとレイ、そして今回の依頼人であるジャネット・アクセルロットなのだ。

レイは周りに人がいないのを確認すると、主にジャネットに向かって——元々、計画の発案者はジークなのだから、ランに向かっての説明は要らないだろう——説明を始めた。

「とりあえず、タイムリミットは明日だから作戦の決行は今日よ。予告状は昨日のうちに私が直接届けておいたわ。下見はランちゃんと一緒にここにくる前に済ませておいたの。それにしても……」

レイは眉をひそめて、ジャネットにささやく。

「この国の軍部って、孤立してるの？ 予告状送りつけたのに警察なんか一人も見かけなかったわよ？ ま、もっとも私達がなめられてるだけかもしれないけどね」

レイが少し自嘲気味に微笑む。ジャネットが慌てて答えた。

「い、いえつ、そんな事ありませんよ！お二人の名声はよくお聞きしましたし、だからこそ私もお二人に依頼したんです。ただ……」

ジャネットが声を落とす。

「ただ、軍部が警察を呼ばない理由はわかります。我が国の軍部は、レイさんのご察しの通り、他の政府機関から完全に孤立しているんです。国家をまとめる存在の大統領ですら、軍部の内部情報を完全には把握し切れておらず、独立した機関になっているのです。」

特に、国内の治安を守る警察、軍部の兵器について意見を出す研究者とは激しく対立をしているのです」

「そうだったの……」

レイはぼそりと呟く。ジークは先ほどから黙って笑っているままだが、握り締めた拳が白くなっている事を考えると、腹の中は煮えくり返っているのだろう。彼は独裁政権を司るつかさどような政治家が大嫌いなのだ。

「それでも、軍部の上役にも現状について反対意見を持っている方もいらっしやいますので、トップさえ警察に引き渡せば、軍部の独立性は多少なりとも改善されるはずだと思います」

ジャネットの言葉で、三人の間に沈黙が流れる。最初に口を開いたのはジークだった。もちろん、女の子の口調だが。

「そんな事、今うじうじ考えてたって仕方ないじゃない。それよりも今夜の事の方が何倍も大事よ？今日失敗したら、もうチャンスは無いんだから」

レイもコクリとうなずく。

「そうそう。まずは機密文書を取り返すことが先決よ。

それで、まずは作戦についてなんだけど……。実際に内部に踏み込むのは、ランちゃんと内部情報に詳しいジャネットちゃんでお願いなね。私は外部で待機して、二人を誘導するわ」

ジークも、なんだかんだ言って結局は作戦を考えているのだ。だからこそ、レイも安心してコンビを組んでいられる。

「大切なのは、絶対に無理しないこと。ランちゃんはともかく、ジャネットちゃんは絶対に顔を見られちゃいけないんだから、ダメだと思ったら直ぐに助けを呼ぶこと。これだけは絶対に守ってね。

あと、ランちゃんが個人的に助っ人を一人頼んだらしいから、そのあたり知つといてね。ああ、大丈夫よ。私も知ってる仲だもの」

ジャネットが怪訝^{けげん}そうな顔つきでチラリと見たので、レイは慌てて一言付け足す。それを聞いて、ジャネットは安心したようにうなずいた。

「さてと、大まかな説明はこれでおしまい。後はランちゃんの指示があると思うから、その場その場で従って頂戴ね」

「はい！」

ジャネットは意気込みを感じさせる声で返事をする。

「さて、せっかくこんなレストランに入ったんだから、何か食べていきましようか？」

レイの提案に、ジークが目を輝かせる。女の子のふりをしていても、食欲だけは誤魔化せないようだ。

「はいはい！エリさんっ！えーと、私コレとコレとコレね！」

メニューを開いて指し示したのは、どれも主食級の物ばかり。レイは早くも胸焼けを感じた。

「ジャネットちゃんは何にする？遠慮しないでね」

「あ、じゃあスパゲティセットを……。お昼まだでしたんで」

「そう。じゃ、私はケーキセットにしようかしら。あのー、すいませーん！」

ウェイターがアタフタと飛んできた。彼は美女三人の視線を一身に受け、耳の後ろまで赤くなっていた。その中の一人は男だということも知らずに……。

何はともあれ、三人は少しばかり遅い昼食(?)をとったのであった。なお、ジークの食べっぷりは、そのレストランのウェイターの間で、しばらく伝説となっただけらしい。

侵入

闇に紛れて、二人の人影が前方の巨大な建物に音もなく近づいていく。辺りを警戒する兵士の視線をくぐり抜け、周りを照らし出すサーチライトから身を隠しながら素早く移動する身のこなしは素晴らしい、見ていてため息が出るようだ。

言うまでもなく、二人の名前はジークとジャネット。全身を黒づくめの衣装で身をつつみ、頭にはレイから手渡されたインカムを着している。ちなみに、インカムはナンシーの親父さん特製だ。彼は類い希な腕を持つメカニックマンなのだ。彼がどのような人物なのか、また、どのようにしてジークと知り合ったのかはまたの機会に……。

それはともかく、彼らは三メートルはあろうかという壁を乗り越え、敷地内に侵入する事に成功した。辺りを見回し、誰もいない事を確認すると、一気に建物まで駆け抜け、見回りの兵士に見つからないよう陰に身を潜める。

しかし、ジークの手際の良さは予想通りだが、驚くべきはジャネットの身体能力だろう。いくら手を抜いているとはいえ、かの大怪盗であるジークの動きについていけているのだ。

「やるやないか、ジャネットちゃん」

「私だって、研究ばかりじゃないんです。体だって鍛えてあるんですよ！ただ何もできないでいる女の子じゃありません！それに……」。

今回の事は、元はと言えば私が原因なんですから、後始末を自分

でつけるのは当たり前ですよ！」

ジークは、威勢良く言い返すジャネットの言葉にチラリと微笑みを見せた。しかし、すぐさま真剣な顔つきに戻って囁く。

「よしよし、その意気や。でも油断したらあかんで。今から建物内部に潜入するけど、セキュリティの強さは今までとは桁が違う。やばいと思ったら、俺をほったらかしてでも逃げえよ。ええね？」

ジャネットも言葉なくうなづく。二人の間の空気が、今まで以上にピンと張り詰める。

まずはジークが驚くほどの跳躍力を生かし、二メートルほど上部にある壁から突き出た通気口にとりつき、頭から潜り込む。続いてジャネットが、ジークの助けを借りてその中に姿を消した。その間、わずか十六、七秒の早業である。

三秒後、見回りの兵士が懐中電灯片手に巡回に来たが、二人の姿はすでに通気口に消えた後だった。

今回の大まかな作戦はこうだ。自らのハッキングによって手に入った国軍総本部の内部地図とジャネットの記憶を頼りに、通気口を通って潜入するルートが一番適当だと判断したジークは、警備が最も手薄になりやすい正門横の第三通気口にターゲットを定めた。そして、ここからレイの出番である。

今回、完全にサポート役に回ったレイは、二人をインカムを通じて外部からナビゲートする

建物のセキュリティシステムに不正アクセスし、監視カメラの映像やその他のセンサーからの情報により、必要なデータを頭の中で

構築し、二人に的確な指示を出す。相手はあくまでも現役の兵士達。まともにやり合ったのでは、ジークの身体能力がどれだけ優れていると言っても多勢に無勢、勝負はやる前からすでに見えている。この作戦が成功するか否かは、彼女のナビゲートにかかっていると言っても過言ではないのだ。

「レイ、こちらジーク。予定通り第三通気口からの侵入に成功した。ナビゲートよろしく頼むわ」

『了解♪』

インカムに取り付けてある発信機からの情報と、パソコンのモニターに映る内部地図とを照らし合わせて、的確に二人を導く。

『ジーク、次の分岐点を右折。その後三つ目の出口から外に出て。その近くにジャネットちゃんの情報と食い違う部屋があるの。倉庫となっているけど、かなり怪しいわね。調べてみる価値ありよ』

「了解！」

『警備はかなり厳しいわよ。二人とも、十分気をつけてね』

レイの指示した地点まで、二人は一陣の風のように移動する。ジークが足元の金網を音を立てないようにゆっくりと取り外す。巡回中の兵士が通り過ぎるのを見計らって、ジャネットを両腕に抱えて音もなく通路に飛び下りる。そのまま二人は例の部屋の前まで走った。

「ジークさん、この部屋です」

ジャネットがジークに向かって囁く。^{わや}なるほど、確かに外見は倉庫に見えなくもないが調べてみるだけの価値はありそうだ。ジークはウエストポーチから手のひらサイズの端末機を取り出す。コネクタを、倉庫の入り口についているセキュリティシステムに接続する。すると、レイの手元にあるコンピューターと連動して電子音となり、ドアのロックが解除された。

二人は互いに視線だけで合図をすると、一気に内部に滑り込んだ。

「そこまでだ！」

突入した二人の前に、三十人あまりの兵士が銃を構えて立ちはだかる。突然目の前に広がった光景に、二人は息をのんだ。ジークの口が素早く動く。インカム越しに、手短にレイに情報を伝える。

「いやいや。ご苦労だったな、ジーク。ラントシュタイナー。そしてジャネット。アクセルロッド研究員」

兵士の間から、ひよろつとした男が現れた。髪の毛はすでに薄くなり、シワはその顔に深く刻み込まれているが、その放つオーラはどす黒く眼鏡のレンズ越しに危険な光を放つ目が垣間見える。^{かいまみ}

「お前が黒幕やな？」

ジークがいやに落ち着き払った声で言い放つ。

「ククク、その通り。私が国軍総本部部長、並びに国軍長官、アルバート。シュヴァルツだ」

男は高らかに言い放つ。ジークは怒りのあまり歯を食いしばって

うめき声をもらす。

「ククク。唸るな、唸るな。此処まで侵入出来たことは誉めてやろう。キミ達の推測通り、ここはただの倉庫ではない。だが、詰めが甘かったな。ジーク君、早速で悪いがキミには消えてもらおう。いろいろ面倒なんだよ、キミがいるとね」

アルバートが片手をあげると、兵士が一人前に進み出た。

「殺れ^や」

高らかに鳴り響く銃声。ジークの顔が歪む。

「ジークさあんっ！」

体が宙を舞う。ジャネットの悲鳴が室内に響き渡る。

床に叩きつけられた体は微動だに動かず、真っ赤な鮮血が銃創^{じゆうそう}から流れ出る。

「これで天下の大怪盗ジークも終わりか」

ジークが飛ばされたときに外れたインカムを踏み潰し、アルバートが誇らしげに呟く。

「さて、アクセルロッド研究員。キミには大事な役目を担^{にな}ってもらうよ。と、その前に。こんな物もう必要ないだろ？」

アルバートは、放心状態で立ちすくむジャネットのインカムを奪うと、足で踏みつけて粉々に砕いた。

ただのモノになってしまった、ジークだった体。呆けたままのジ
ヤネット。彼女に銃を突きつけたまま動かない兵士達。室内には勝
利の余韻に浸るアルバートの高笑いだけが響いていた。

窮地からの反撃

一台のボックスカーの車内で、レイは六台ものノートパソコンと格闘していた。ジークからの緊急連絡が入った。ジャネット救出のために、すぐに施設内に侵入しなければならない。

体にフィットした黒いスーツを身にまとい、インカムを装着する。小さいリュックを背負い、ホルスターに黒い自動式拳銃オートマチックを差し込む。

もう一度ノートパソコンを覗き込んだ。その時、

インカム越しに銃声が轟いた。

『ジークさあんっ！』

響き渡る、ジャネットの悲鳴。

レイは思わずその場に立ちすくむ。

「そんな……。私、聞いてないわよこんな計画……。ムチャクチャじゃないの。いくら独裁者を許さないからって……。危険すぎる、成功したらそれこそ奇跡だわ」

固まっていたのもつかの間、レイは張り詰めた表情で車の外に飛び出した。そのまま、闇の中に溶け込んでいった。

窓もなく、入り口は一つだけ。部屋の中にあるのは幾台ものパソコンだけ。そんな部屋に、ジャネットは連れ込まれた。入り口には、完全に武装した兵士が二人、脱出出来ないように見張っている。一人はジークを射殺した男だ。

ジャネットは、一台のコンピューターの前に無理やり座らされた。その前の席にアルバートがふんぞり返って座る。

「君には素粒子分解光発生装置の最終作業をやってもらうよ。まったく、君たち研究者も用心深いものだね。悪用、乱用を防ぐために、最後の重要な鍵となるプログラムをワザと抜いておくなんて」

ジャネットは、体を恐怖のあまりふるわせながらも、アルバートを正面から睨みつける。

「あの装置を使つて、一体何をしようと言つのですか？あれは兵器じゃないのですよ？」

アルバートは薄ら笑いを浮かべた。

「何を言っているんだね。『素粒子分解光発生装置』。巨大化し、人に向けて使用すれば立派な大量破壊兵器じゃないか。最強の兵器をこの手にして、まずは手始めにこの国を乗っ取る。そして、最終的には全世界を我が物とするのだよ」

「そんな……、私たちは、決してそんな事のためにあの装置を発明したわけではないのに……」

「ククク、だから君たち研究者は甘いと言っただ。地上最強の兵器だぞ？そのために使わずして、何のために使うのだ？」

アルバートは一転して高笑いを始めた。今度は怒りのあまり、ジャネットの肩がふるえる。

「そんな……。私たちの研究は人を幸せにするための物。そんな、人を不幸に陥れるための事に使われるなんて、私たちの研究に対する気持ちは一体何だったの？」

その瞳に涙が浮かぶ。感情の高まりを抑えきれないようだ。

「何と言われようが、私は構わないよ。自分の野望の為には手段を選ばない、それが私のモットーだからね。」

さて、お話もそろそろ終わりだ。君にはもはや選択の余地などない。生きのびたければ、プログラムを完成させるんだね。ああ、心配するには及ばない。上手くいった暁には、君を我が国の重要ポストに就けてあげよう。私は夢を叶え、君は一生涯安泰で暮らせる。いい交換条件だと思うのだがね。

食事はきちんと三食、持ってこさせよう。必要な物があれば遠慮なく言うように。外にだけは出せないけどね。完成を楽しみにしているよ」

アルバートは、取り繕ったような笑みをジャネットに向け、椅子から立ち上がった。彼女を一人残したまま、アルバートは出口に向かう。

「いいな、決して逃がすなよ。逃げようとした場合は、構わんから殺してしまえ。なに、国营施設に侵入したのはあちらだ。後でなんとでもいい繕えるさ。」

ま、頭がいくら良くても所詮は小娘だ。一人では何も出来ないだろうがね」

アルバートはジャネットに聞こえるように、ワザと大きめの声で入り口に立った兵士に指示を出す。そのまま、高笑いしながら部屋から離れていった。もはや脱出は絶望的だろう。金属製の扉が、無機質な機械音をたてて閉められた。

ジャネットの口から嗚咽おえつがもれる。今までアルバートに弱みを握られまいと押し込めていた感情が、一人になったとたん一気に溢れ出した。

「くうっ……、ジークさん……」

ジャネットの脳裏に浮かぶのは、ジークの最期の場面。室内に響き渡ったあの銃声が耳から離れない。

舞い上がった体。流れ出る紅い液体。鮮烈な光景が目には焼き付いたままだ。

彼女はジークの死に、かなりの責任を感じていた。そもそも、元凶の設計図を作り出したのは自分たち研究者なのだ。結果的に、ジークはその尻拭いの巻き添えを食って命を落とした。それは紛れもない事実なのだ。

対人兵器の開発にたずさわって人殺しの手助けをするくらいなら、

むしろ自分が死んだほうがましだ。他人が死んでいくのは耐えられない。大勢の人々を、いろいろな面で助けていくために自分は研究者の道を選んだのに……。でもどうせ死ぬのなら、ただで死ぬわけにはいかない。

ジャネットは涙に濡れた顔を上げた。その瞳には、強い決意と覚悟がにじみ出ていた。

彼女は席を引くと、パソコンの電源を立ち上げた。どうやら、設計図のデータはアルバート自らが持ち歩いているようだ。

大丈夫、方法はまだある。この施設もろともあの設計図をも消してしまえば、この国から脅威は排除される。

部屋に備え付けられたパソコンは、不用心な事に施設のネットワークにつながれていた。まさか施設内部のパソコンからハッキングされるとは思っていなかったのだらう、メインサーバーのファイアウォールに僅かばかりの穴があった。ジャネットは持ち前の知識をフルに活用して、その不備を逃さずに侵入に成功する。

「あまりなめないで欲しいですね。女性には機械に疎いとも思っているのでしょうか？」

私だって、その気になればハッキングくらいやってのけるくらいの知識は持っているのに」

ジャネットの両手が、キーボードの上を踊るように行き来する。みるみるうちに、セーフティシステムのプログラムが彼女の手によって書き換えられていく。

彼女の考えはこうだ。軍事施設と言うからには、少なからず爆薬

等の備品があるはず。それを爆発させるのだ、例の設計図もろともに。もちろん、火が燃え広がるまでにセーフティシステムが作動して消火されてしまつては元も子もない。故に、それを解除する。

皆さんは、この計画の穴にお気づきだろうか？そう、肝心の発火場所はどつするののか、という問題だ。どうあがいても、遠隔操作で火を起こせるわけがない。一体、ジャネットはどうするのか。

プログラムの変更を終了した彼女はおもむろにパソコンの電源を落とすと、コンセントからプラグを引き抜いた。そして、靴の裏に隠しておいたカッター——もちろん、ジークのアドバイスの物だ——を使ってコードのビニールカバーをはがす。そして、再びプラグをコンセントに差し込む。

むき出しになったコードに、高圧電流が流れる。彼女は上着を脱ぐと、それをビニールカバーをはがした部分に近づけた。

「ふーん、よく考えたものね。可燃性の物質に高圧の電流を流し、発火させる。拍手したいくらいだわ。でも、私としては止めてほしいんだけどね」

聞き覚えのある、どこか安心させる声。ジャネットは上着を放り出し、慌てて後ろを振り向く。

「お疲れ様、ジャネットちゃん。迎えに来たわよ」

「レイさん！」

部屋の真ん中には、優しいな微笑みを浮かべたレイが、胸の前で腕を組んで立っていた。

集(つど) いし四人

「レイさん……」

「ごめんね、怖い目にあわせちゃって」

レイが肩をすくめて笑う。その笑顔に安心したのか、自分が壊れないように今まで張り詰めていた感情が爆発したのか、ジャネットの目に再び涙がせり上がってきた。

「すみません、レイさん……。私のせいで、ジークさんがっ」

ジャネットはその場に座り込んでしまった。今度はレイが慌てる。

「ちょっと、何言ってるの？」

「だ……だって、私が依頼した仕事で、ジークさんが……。ジークさんが殺されたのは私の責任なんですっ！」

ジャネットは半ば叫ぶように言い切ると、声を上げて泣き始めてしまった。レイはますます困惑する。

「ちょっとジャネットちゃん、ジークから何も聞いてないの？」

ジャネットは首を激しく横に振る。レイはそんな彼女の様子を見て、近くまで寄って膝をつき、両腕に抱きしめた。

「本当にごめんね、怖い思いをさせて……。大丈夫よ、ジーク——いや、あの大バカは死んでないわよ」

優しくかけたその言葉が耳に届いたのか、ジャネットはしゃつくりを上げながら、涙に濡れた顔をレイに向けた。

「どういう……意味ですか？私は……ジークさんが撃たれたところを……見たんですよ？」

「そうよ。あの大バカは、まさに『敵を騙すならまず味方から』という事を実践したのよ。さすがに私はだませなかったけどね」

「……？」

ジャネットは、ますます訳が分からなくなったようだ。そんな彼女の顔を見て、レイはにこりと笑う。そして、おもむろに扉に向かって声を上げた。

「一応、説明は終わったわ。いいわよ、入ってきて！」

扉が音を立てて開く。ジャネットが息をのんだ。ジークを撃った兵士がこちらを向いて立っていたのだ。その足元には、片割れの兵士が白目をむいて倒れている。

「バレていたか。さすがアイツと長年コンビを組んでいることはある。考えていることはお見通しってわけか」

その男は、なんと笑いながらレイと握手を交わした。ジャネットは、ただただ目を丸くするばかりだ。

「な、なんですか？どうなってるんですかつ？」

「あれ？言ってなかったっけ？彼があの大バカが言っていた、三人目の協力者よ」

レイの言葉に、男は会釈をした。そう、彼こそ例の『マグナム』の持ち主。

「俺の名はマクレガーだ。よろしく」

がっしりとした筋肉質の手を、ジャネットに差し出す。彼女は戸惑いながらも握手に応じた。驚きのあまり、涙はすでに止まっている。

「まったく、かわいそうになあ。あんなに怯えちまって……。女の子に涙を流させるとは、まったくジークも仕方のない奴だ。ま、おかげでアルバートを追い詰める証拠はつかめたがな」

マクレガーは唇をまくりあげて笑うと、上着の内ポケットに手を突っ込んでカセットテープを取り出した。再生ボタンを押すと、スピーカーから雑音混じりの、だがしっかりと聞き取れる音声が出る。

『ザ……、まず手始めにこの国を乗っ取る……、そして、最終的には全世界を我が物とするのだよ……』

言わずもがな、テープに録音されていたのはアルバートの声だ。ジャネットの目が、より大きく見開かれ、開いた口がふさがらない。

「こんだけありゃあ、まず国家反逆罪は免れないだろ。アルバートのヤツもおしまいだな。後は誰がコイツを警察に渡すかだが……」

ポケットに戻しながらマクレガーは満足そうに言う。

「じゃあ、ジークさんはこの自白テープを得るために、私に黙って死んだフリを……？」

「ま、当たらずとも遠からずってとこやな」

「っ!？」

有り得ないはずの人物の声。ジャネットは猛烈な勢いで振り返る。開け放しになった扉。そこには、黒い服に血のりはついてはいるものの、満面の笑顔でたつジークの姿があった。

ジークはもたれていた扉の縁から身を起こすと、頭を掻きながら三人の方へ歩いてきた。

「いやゝ悪かったなあ、騙したりなんかして。でも、ジャネットちゃんには心が真っ直ぐやから、きつと演技やったら簡単にバレとつたやろな。目を見たら、嘘か真かくらいすぐに分かってまうから——ふっっ！」

得意気に話すジークの右頬に、レイの『黄金の右ストレート』が炸裂する。ジークは奇妙な音を発して、床に叩きつけられた。

「い、いきなり何すんねん！」

ジークは頬をさすりながら、涙目で立ち上がる。

「この、大バカ!どんな理由があろうと、死んだフリなんて何を考えてるのっ!私ならともかく、ジャネットちゃんまで騙すなんてど

ういつつもり？」

「ぎゃふん！」

続けて『幻の左フック』が、ジークの右側頭部に命中する。ジークはあられもなくその場で一回転した。

「レ、レイさん。もういいですよ……。ジークさんも生きてらしたんですから。作戦も成功しましたし、私が隠し事をできないのも本当の事ですし……」

しかし、レイは振りかぶった右拳を引くつもりはないようだ。

「いいえ、こんなヤツ、もっと罰を受けて当然なのよ。女の子に涙を流させるなんて……」

やめる気配のないレイに、たまりかねたマクレガーが間に入る。

「レイ、少し落ち着け。コイツがやったのはとんでもない事だが、とりあえずそのあたりで止めておかないと、せつかくここまで上手くいっている計画がおじゃんになるぞ。あんまり時間はないんだ」

マクレガーの言葉に、渋々レイは拳を下ろした。ジークはよろけながらも立ち上がる。そして、ウェストポーチから、一枚のＣＤロムを取り出した。

「と、とりあえず、全員の目が俺から離れた隙に、俺の方も盗るもん盗つといたから。安心せえや」

「何、それは？」

レイの質問に、笑顔だけで答えるジーク。

「じゃあ、仕事は成功なんですね？」

「そゆ事。んじゃま、脱出しよか。こんなところ、長居しとつてもしやーないし」

しかし、彼の言葉が終わるか否かの刹那、館内に非常ベルが鳴り響いた。全員が、弾かれたように顔をあげる。四人の間に、一斉に緊張が走る。

「なんや、もうバレたんか？俺の死体がダミーと入れ替わったのに気付いたんか？」

ジークがつぶやく。ジャネットが顔色を変えた。

「もしかしたら、さっきのハッキングが見つかったのかも知れません。セキュリティはいまいちでしたけど、思ったより対ハッキングプログラムは強力みたいです」

落ち込む様子のジャネットに、ジークが励ますように言う。

「大丈夫、大丈夫。別に気にするほどの事やない。自慢やないけど、これくらいの事やったら普段から慣れとるから」

「いや、それは本当に自慢できる事じゃないぞ……」

マクレガーの指摘に、ジークは苦笑いで返した。

「何にせよ、さつさとずらかるうで。マックは俺と一緒に兵士の気をそらす。レイはその間に逃げえな。頼んだで」

「了解♪ジャネットちゃん、行くわよ。しっかりついてきてね」

「あ、はい！」

二人は、レイが侵入してきた通気口に姿を隠した。レイに任せておけば、ジャネットの命に危険が及ぶことは、ひとまずはないだろう。とりあえず手は打った。全員が無事に脱出できるかは、ジークとマクレガーの実力次第だ。

残された二人は、それぞれホルスターから回転式拳銃リボルバーを取り出した。シリンダーに弾丸を込める。

「おい、ジーク。お前、実弾は撃たないんじゃないのか？」

「場合によりけりってな。空砲や麻酔弾やったら威嚇にならんやろ？実弾やったら他のことにも使えるし。要は人を撃ち殺さんかったらええんや」

ジークが右手で銃を振りながらマクレガーに笑いかける。ジークの銀色の拳銃に対して、マクレガーのはただならぬ気配を放つ黒い銃。不気味に殺気を放つ。

「ま、俺は構わんが……。頼むから俺の足だけは引つ張るなよ。実弾を撃ち慣れてないという言い訳はなしだぜ」

「はん、それはこっちのセリフや。お前こそ人殺すなよ？俺と組んでいる以上、殺人は許さへんからな」

「む……、それは俺の本来の仕事が暗殺だったのを知った上での言葉か？……お前との仕事はおもしろいんだが、そこが難点だな。しかし、他ならぬお前との契約だ、承知したと言っておこつ」

二人は顔を見合わせ、同時に吹き出す。

「ぶあはははっ！『承知した』だあ！？マツク、お前にそのセリフは似合わへんって！」

「うるせえ、お前こそ人のこと言えるかってんだ！」

そのまま、二人は声を上げて笑いあつた。これから危険に飛び込んで行くというのに、まったく緊張感のない連中だ。それは己の力に絶対の信頼——決して慢心ではなく——をおいているからであるうか。

ひとしきり笑った後、今度は一転してきりりとした真剣味を瞳に帯びる。二人は互いに目配せし、うなずきあうと、一斉に廊下へ飛び出していった。自ら活路を切り開くため、そして大切な仲間を守り抜くために……。

集(つど) いし四人(後書き)

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

さて、今回は『年明け特大号』と勝手に題しまして、四話一挙に公開とあいなりました。どうでしたでしょうか。物語はいよいよ中盤の山を越え、これから一気にラストに向かって展開していきます。残り三、四話で完結の予定ですので、よろしく願います。

感想は随時、募集しております。気になった点等ございましたら、遠慮なく書き込んでください。全力でお答えいたします。

先日、次深先生発案のグループ小説・時任楓『銀色の魂^{しろがねいそ}』を投稿しました。他の参加メンバーの先生方の作品も力作ぞろいです。ぜひ一度ご覧下さい。

！
それでは、また次回でお会いしましょう。以上、針井龍郎でした

アルバートⅡシュヴァルツの誤算

施設内のある部屋。分厚い絨毯が敷き詰められ、真ん中には上等なソファアが、輝かんばかりに磨かれた机を挟んで両側に置かれている。隅には観葉植物が緑の葉を茂らせ、その部屋の奥には、どつしりと重そうな机が備え付けられている。

そこにふんぞり返って腰掛ける一人の初老の男。アルバートⅡシュヴァルツである。彼こそ今回の黒幕、ジークと敵対している人物だ。彼は手元に置かれたＣＤロムを眺めながら、満足そうに口元を歪ませてにたりと笑った。

「ククク、これさえ手に入れば、全世界を私の足下にひざまづかせることができる。かつてあらゆる英雄が挑んでは到達できなかった千年王国を我が物とするのだ」

アルバートはそう独り言を言った。しかし、苦虫を潰したようにすぐに顔をしかめる。

「しかし、研究者どもも下らんことを考えたものだ。策略を重ねてようやく手に入れたと思えば、重要なプログラムがぬけ落ちていて使えないとは。まあ、どのみち近いうちに完成するのだがな」

アルバートは再びにたりと笑う。まったく、独り言の多い男だ。一人で笑って、気味の悪いことこの上ない。

しかし、その笑い顔もそこまでだった。突然、館内に非常ベルのけたたましい音が騒然と鳴り響く。突発的な出来事に、アルバートは顔をなくして一瞬その場に凍りつく。

が、すぐさま我に戻り、電話の内線ボタンを押して怒鳴るように通信する。

「おい、どうなってるんだ！説明しろ！」

『そ、それが……』

「一体何なんだ！はっきり言わんか！」

アルバートに怒鳴られて、内線から聞こえる声の調子が怯えたように変わる。

『すいません、メインサーバーに何者かが侵入したようです！セキユリティーシステムのプログラムが書き換えられているのです！』

「なんだとおっ！？逆探知はっ！？」

『はっ！それが、この施設内のパソコンからなのです！』

「なにい？まさか、あのアマ……！モニター室の連中は一体何をやってるんだっ！」

口角泡をとばしながら、叫ぶアルバート。先ほどまでの温厚そうな口調からは考えられないほどの変わりようだ。応答している兵士がかわいそうになってくる。

『先ほどから呼び掛けているのですが、返答がないのです』

「なんだと……？すぐさまモニター室に直行しろ！俺も直ぐに向か

う！」

アルバートは通信を中断すると、机の引き出しから自動式拳銃オートマチックを取り出し、ズボンの右ポケットにねじ込んだ。椅子から立ち上がり、廊下へ出てモニター室へ急ぐ。自ら確かめに行くというのは、まがりなりにも元軍人であつた頃の名残であろうか。

五つの扉を過ぎた所が、目的のモニター室だつた。しかし、その部屋の扉の前には先にたどり着いていた兵士が二人、足止めを食つていた。

「お前たち、そんなところで何をしているんだ。さっさと中に入らんか！」

アルバートの声に、兵士が振り返つて敬礼をする。

「申し訳ありません。モニター室の扉にロックが掛かつていて、私たちでは開けることができないのです。マスターキーならば可能だと思ひますが……」

「何だと……。分かつた、そこをどけ」

アルバートは上着の内ポケットからカードキーを取り出すと、扉の横に設置されているカードリーダーに通した。電子音が鋭い音を立てて鳴り、扉が開く。

「な、これは……？」

急いで中に入った三人は、室内の惨状に愕然とした。モニター室にいた七人の男が全員床の上に倒れているのだ。兵士が慌ててその

元へ駆け寄る。わずかに残った刺激臭が、かすかに三人の鼻をついた。

「アルバート様、全員命に別状はありません。ただ、睡眠薬のようなもので眠らされているようです」

兵士の一人が、仲間の体を起こしながらアルバートに報告する。しかし、アルバートの視線はすでに別の場所に釘付けになっていた。

「畜生っ！ジークのヤツ、まだ生きていたのかっ！

命に別状がないなら、眠らされている奴に手を貸す必要などない。今すぐ総員、現場へ急行させろ！もう許さん。女ともども発見次第、皆殺しにしてしまえっ！」

「はっ！」

二人の兵士が伝令のために、駆け出していく。アルバートは怒りに肩を震わせ、ゆっくりとモニター室を後にした。

暗い室内で、薄ぼんやりと光るモニター。そこに残されていたのは、『ジーク参上！獲物は頂いた！』という大きな落書き。そして監視カメラの一つには、廊下を得意げに笑いながら疾走する、ジークとマクレガーの二人の姿が映されていた。

画策と策略

非常ベルの鳴り響く中、二人の男が狭い廊下を駆け抜ける。言わずもがな、ジークとマクレガーのコンビだ。二人は息を切らせることもなく、無言で疾走する。

それにしても、運がいいのか、それとも罠にかかっているのか、先ほどこから一人の兵士とも出くわさない。レイとジャネットが脱出する間の時間稼ぎのため、出口までの最短経路を使わずにいるからだろうか。いずれにせよ、警戒するにこしたことはない。ジークはちらりと相棒に目配せを送った。拳銃を持つ手に、自然と力がこもる。

二人の通るルートは、施設内を大きく迂回し、出口にいたる物だ。彼らは右へ左へと無作為に通路を選んで通り抜ける。

だが、次第に分岐点が少なくなり、廊下が一本道になってきた。ジークは出口が近いと考え、いつそう足を速めた。

「おい。ちょっと待った、ジーク」

突然、マクレガーが立ち止まった。先ほどとは打って変わって、声にも言いがたい焦りが混じっている。

「やばいぞ、ジーク。こいつは完全に罠みたいだぜ」

「なんやて？」

冷や汗を流すマクレガーに、ジークはたたみかけるように問いか

ける。

「俺らは今まで、自分らの好きなように通路を選んで走ってきてるんやで？それともなんや、俺らが知らん間に、アイツらに勝手に誘導されとるって言うんか？」

「悪いが、少なくとも俺はそう思う」

「な……」

マクレガーの予想外の言葉に、ジークは愕然とした表情を浮かべて、しばしの間絶句する。さすがのジークでさえ、この状況下で冷静を保つことはできないようだ。

マクレガーが、続けてジークに説明する。

「例えば、この施設自体、巨大な迷路になっているとか。脱出経路が、実は完全にカモフラージュされているとか」

「アホなこと言うな。俺は一回下見で侵入して、脱出してるんやぞ？」

「その時はその時だろ？俺らが今通っているのは、あくまで下の通路なんだよ。政府の公的機関だと思ってバカにしていたら痛い目に遭うぞ。仮にもここは軍事施設なんだ」

「む……」

ジークは、悔しさをにじませて、唇をかみしめた。

「お困りのようだね、ジーク君」

どこからともなく声が聞こえた。突如として現れた数十人の兵士が、息を継ぐ暇もなく、二人の周りを幾重にも取り囲む。そしてその後ろの影から、声の主がゆっくりと姿をあらわした。

「おいでなすつたな、アルバート」シユヴァルツ」

先ほどの表情から一転して、口元に不敵な笑いを見せるジーク。それを精一杯の強がりだと判断したのか、アルバートはにやりと口元をゆがませ、二人に話しかけた。

「本当に見事な腕前だったね、完全にだまされてしまったよ、ジーク君。それにマクレガー君。裏社会の暗殺業で有名な君が、ウチの兵士に紛れ込んでいるなんて、夢にも思わなかった。実際、先ほどのジーク君の話を聞くまでは、キミの存在なぞ気にもとめなかったからね」

「そいつはどうも」

マクレガーがぼそりとつぶやく。それを耳にとめて、アルバートはにやり笑いをさらに大きくした。

「ま、それはそうと詰めが甘かったね。君たちは、今、ここで死ぬ。あの女二人も、今は逃がせてやる。だが、監視カメラの映像がある以上、ジャネットは警察のお尋ね者だ。もはや私からは逃げられない。あの女怪盗も、いずれ始末する。そしてその時にこそ、私の野望が達成されるのだよ。千年王国の樹立という、野望がね。ま、これから死んでゆく君たちには関係のない話だが」

「うるさいな、だまってるのか？」

「……なんだと？」

「だまれつつつてんのが分からんのか？ 耳の穴かっぽじってよう聞きやがれ。」

俺はなあ、お前みたいなヤツが反吐が出るほど嫌いなんや。自分のことしか考えとらんお前のようなヤツがなあ。

人間にはな、他人を不幸に陥れる権利なんか、どんなヤツにもあれへんのや。そんな事は、決して許されるような事やない。許されるのはただ一つ、他人の幸福を守ることだけ。お前のやろうとしていることは、この俺が、命にかえてでも、絶対に阻止して見せたる！」

「ま、そう言うことだ」

ジークに続いて、マクレガーも同調する。二人の発する威圧感が、先ほどよりも格段に増している。

「貴様らは阿呆か。^{あほう}この状況下で不利なのは、完全に貴様らの方だろうが。泥棒と殺し屋風情が、知った口をききおつて。これ以上、貴様らに何ができる！」

アルバートが右手を挙げた。前列にいた兵士が、一斉に行動を起こす。重い金属音が鳴り響き、十個の砲門が一斉に二人に向けられる。二人の目が、ぎらりと輝いた。

「もう貴様らにはつき合つてられん。今すぐここで消えてもらおう」

高々と挙げられていたアルバートの右手が、一気に振り下ろされる。高らかな銃声が十発、通路中に鳴り響き、そして辺りは水を打

ったように静まり返った。

The Time Of A Judgment

火薬の発するつんとした刺激臭が、青白い煙とともに辺りに漂う。そして一瞬の空白の後、通路に恐ろしいばかりの絶叫が響き渡る。

アルバートは呆然として突っ立ったままだ。驚きのあまり、声なく口をはくばくさせている。

血を流して倒れているのは、ジークとマクレガーではなかった。二人は得意げな顔で、銃口からいまだに煙を漂わせている拳銃を構えたまま、アルバートに向かってにやりと笑った。アルバートは、思わずじりつと後ずさる。

「……クイックドロ五点連射、だと……？ 十人があつという間に……、そんなバ力な……」

通路の床に血を流したまま呻うめいているのは、二人に銃を突きつけていた十人の兵士たちだった。

——アルバートが右手を振り下ろしたあの瞬間、二人は一瞬で行動を起こした。銃を握った利き腕が霞のように動き、それぞれが刹那の内に五発つつ火を噴いた。

二つの銃口から射出された十の弾丸は、あやまたず十人の兵士の利き腕の肩関節を粉々に撃ち砕く。そして彼らはあまりの激痛に銃を取り落とし、床に倒れ伏したのだ。

「お、お前ら何をしている。早くヤツらを撃ち殺せ！ ばやっとするなア！」

我に戻ったアルバートが、逆上して周りの兵士に怒鳴りつける。目の前で起こったことに啞然としていた兵士たちも、アルバートの怒鳴り声で我に返り、二人に向けて銃を構える。

しかし、銃が火を噴くより早く、ジークは動いた。ジークは左手を素早く左ポケットに突っ込み、取り出した何かを床に叩きつける。瞬間、その場からもうもうと黒い煙幕が立ち上り、その場にいた全員の見界を、瞬く間に奪い去る。

「なんだ、これは！」

「くそつ、何も見えない！」

「早く撃たんかつ！ いや、待て、撃つなあっ！」

兵士たちのざわめきとアルバートの怒鳴り声が、黒煙の中にむなしく響き渡る。ジークの狙い通り、敵の兵士は銃を撃つことができないのだ。

このような場合、多勢の側は分が悪くなる。同士討ちを考慮してむやみやたらに銃を乱射するわけにはいかないからだ。その点、少人数の二人はそれを気にする必要などない。視界の悪い中でも、背中合わせに立てば同士討ちの心配など無用だ。

ジークとマクレガーの二人は、視界ゼロの状況にもかかわらず、兵士の肩のある一点のみを正確に撃ち抜き、次々に戦闘不能にしていく。一流のガンマンは、たとえ目で確認できずとも、気配で敵の位置を感知し、正確に弾丸を命中させることができるという。まさに今、二人がやっているのがそれだ。

さらに、瞬間的な六^{クイック}点連射と、無駄な動きがなくなめらかな次弾^{リロ}装填^{イド}。その二つの技術が、ただの回転式拳銃^{リボルバー}の連射能力を、極限にまで高めている。

ようやく施設の空調設備が作動し、煙幕がはれた頃には、三十人以上いた兵士は一人残らず床に伏していた。黒煙の中でやられた兵士たちは、ご丁寧に両肩を撃ち抜かれている。立っているのは、ジークとマクレガー、そしてアルバートの三人だけだった。

「くそがつ！」

顔を怒りでゆがませたアルバートが、ホルスターから自動式拳銃^{オートマチック}を抜く。しかし、引き金を引く間もないまま、それはアルバートの手から撃ち落とされた。乾いた音を立てながら、それは廊下を滑っていく。マクレガーの銃口から、青白い煙がすうっと上がった。

「無駄なことはやめえな。お前の実力じゃ、俺らにはかなわへん」

ジークが、刺すような視線をアルバートに向ける。最後の望みだった拳銃を奪われたアルバートは、それに威圧されて無意識のうちにじりつと後ずさる。

「そろそろ年貢の納め時や。最期くらい、観念せえな」

ジークは、銀色の拳銃を肩の高さまであげる。そして、照準をアルバートの額に、寸分違わす突きつける。

「ふ、ふふん。脅しは結構だが、君にその引き金が引けるのかね？
か、怪盗ジークは命をとらない泥棒として有名だと、き、聞いた

のだね？」

ジークに睨まれ、額から脂汗を流しながら、アルバートがつかえつかえ言う。それを聞いて、ジークは恐ろしいばかりの笑みを浮かべ、いきなり銃の引き金を引いた。

「ぎゃあうっ！」

乾いた炸裂音が鳴り響き、ジークの銃が火を噴いた。弾丸はアルバートの右肩を貫き、肩関節を粉々に砕く。赤い液体が、ぽつぽつと無機質な廊下の床を鮮やかな紅に染め上げる。アルバートはあまりの激痛に、がくりと膝を折った。

「今のが答えや。納得いったか？ 確かに俺は殺しはせえへんようにしとる。せやけどな、必要なときは躊躇なくこの引き金は引かせてもらうで？ よう覚えとき」

いまだに銃口から煙を漂わせている銃を、ジークは再びアルバートに突きつける。あまりのプレッシャーに耐えきれず、アルバートは顎をがくがく震わせはじめた。

「さて、思ったより長なったな。そろそろ終わらすか……。

——今、裁きの時や」

アルバートの目が、あまりの恐怖にいつばいに見開かれる。ジークの右手の人差し指が、ゆっくりと手前に引かれた——

すべての終わり

「スミス警部。全員、大怪我を負ってはいるものの、命に別状はない模様です」

「分かった、ご苦労だった。それにしても……、一体これはどういうことなんだ？」

部下から報告を受けて、おおがらな警部、スミスがぼやいた。

——警察にかかってきた、一本の匿名の電話。

——今すぐ、政府軍総本部に行ってみいな。おもしろいもんが見れんで——

独特の訛なまりのある話し方。変声機で声を変えていたからはつきりとは断言できないが、おそらくジークだろうとスミスは推測した。仮にジークならば、嘘の情報を警察にもらすわけがない。追う者と追われる者、両者の間には不思議な関係が生まれていた。

総員をかき集めて急行した彼らは、目前に広がる予想以上の光景に、ただただ息をのむばかりだった。

いまだに火薬の匂いの立ちこめる中に、自分たちの血液で真っ赤になった兵士、およそ四十人あまりが、そこら中でうめき声を上げていたのだ。

驚くべきはその肩の銃創だ。

派手な出血と激痛の割に、誰一人として致命傷を負ってはいないの

だ。確かに銃弾はあやまたず肩関節を撃ち砕き、その腕を機能させなくしてはいる。しかし、動脈も神経すらも傷つけることなく、弾丸は肩を貫通しているのだ。正確無比な狙いと、絶妙な射出角度。さらに緻密な知識が揃って、初めてなせる業。まさに神業と言える。

とりあえず救急車を手配し、彼らは施設の奥へと入っていく。そして、ある一つの部屋の扉が開いているのに気づき、その中を覗き込んだ。

そこにアルバートはいた。彼は椅子に座らされていた。右肩を撃ち抜かれ、血を流しながら、力なく机の上に倒れ伏している。その頭のすぐ横には、例のカセットテープが、何度も何度も同じセリフを繰り返し続けていた。

警官の一人が急いでアルバートのそばに駆けつける。

「スミス警部、まだ命はあります。ただ眠らされているだけのようです」

警官がスミスに報告する。なるほど、たしかに額には麻酔弾のようなものが突き刺さったままになっていた。

「よし、分かった。先に手錠をかけておけ。逃げられてはかなわん。その後で、ほかの者と同様に救急車に乗せていけ」

「はい」

スミスは、カセットテープを手に持ちながら、にやりと笑った。そして、ぼそりとつぶやく。

「まったく、ジークも味なことをやってくれるもんだな」

闇の中の二人

暗闇の支配する細い路地を、二人の男が高らかに靴音を響かせて歩いていった。黒い服を着込み、気配を断ち切っているので、端から見れば靴音だけが近づいてくるだけのようにも感じられる。夜の帳のその奥で、かすかにサイレンが鳴り響いているのが聞こえる。

「結局、ヤツの命はとらなかつたんだな」

マクレガーがぼそりとつぶやいた。ジークもぼんやりと返事をする。

「まあな。正しいと信じることのために自分の手を汚すのはためらわへんけど、さすがにあんなくだらん男の血で、この手を汚したくはないわな」

「ふうん。ま、お前らしいと言えばらしいがな。それにしても、どうしてあのタイミングで麻酔弾なんだ？ 実弾しか装填してなかったじゃないのか？」

マクレガーの疑問に、ジークがふつと頬をゆるめて答えた。

「ああ、それが俺の銃の特性や。シリンダーに細工がしてあつてな、六発の弾丸以外にもう一発装填できるようになってるんや。普段はそれを撃ってしまわんようにシリンダーが回転するんやけど、特殊な操作をする事で撃てるんや。ま、『イタチの最後っ屁』ってことやな。ダンにかなり無理言って装備してもらたんやわ。いかなる状況下でも、相手を制せられるようにな」

「そうか……」

マクレガーはポケットからタバコを取り出し、火をつけた。深く煙を吸い込んだ後、ふうつとはきだす。白い煙が、月の見えない夜空に消えていった。

「そう言えば、例の嬢ちゃんはどうした？ レイと一緒になのか？」

「そうや。このまま泥棒と行動しててもろくなコトあらへんし、警察に通報する前に先に帰したんやわ。依頼の品は渡したから大丈夫や」

マクレガーは返事の代わりに、再びタバコの煙をはきだした。先端にともる赤い火が、暗闇の中に浮かび上がる。

「それはそうと、マック、お前ウチに来ーへんか？」

ふと、ジークが声をかけた。マクレガーが、とぼけたような声で返事をする。

「いいのか？」

「ああ。一緒に仕事するのも久しぶりやし、何よりも、直接会うこと自体一年ぶりやし。つもる話も色々あるやろ」

「じゃあ、お言葉に甘えるところかな」

「おうよ」

ジークがにやりと笑いながら返事をする。マクレガーはふっと息

をもらした。タバコの先端から立ち上る紫煙が、ゆらりとよどんで消える。

音もなく、月の光も届かない街角。黒づくめの二人組は、闇の中にとけ込んでいった。

終わりになき明日

ここは町外れにある一軒家。東向きの小さな窓から、眩しいばかりの朝日が差し込む。

「皆さん、起きてくださーい！ 起床時間ですよー！」

ナンシーの声とフライパンを叩くけたたましい音が家中に響き渡り、長いようで短い一日が始まる。

まずはじめに、例の仕事の後、ナンシーの家にお世話になっているマクレガーが起き出してくる。いつも通りの険しい目つきだが、スリッパを左右逆にはいているのは内緒だ。

続いて、低血圧で朝の弱いレイが、ふらふらになりながらも地下の階段から上がってきた。普段はつやつやとした髪の毛が、ぼさぼさになってしまっている。

レイから遅れること約五分。地下室から、床を揺るがすほどの音が聞こえた。レイとマクレガーは、その音でようやく夢つつつから解放される。

「はい、どうぞ。コーヒーですよ。熱いで気をつけてくださいね。それにしても、ジークさん遅いですね。また階段から落ちたのかしら？」

先ほどの音に少しも動揺することなく、ナンシーは二人の前に、湯気の立つコーヒーの入ったマグカップを置いた。こんなことにいちいち気を使うようでは、怪盗と同居なんてやってられないのだろ

う。

しかし、日頃一緒に生活していないからだろうか。マクレガーがレイにぼそりと、心配そうに声をかける。

「おい、今すごい音がしたぞ？　大丈夫なのか？　一度、見に行った方がよくないか？」

「大丈夫よ、いつものことだし」

レイは実にめんどくさそうにマクレガーの言葉を左手で払いのけた。

「それならいいのだが……」

さらに遅れること約五分。ようやくジークが階段から抜け出してきた。まぶたは半分以上閉じ、キッチンに近づいてくる途中で、あらゆるものにけつまづき続けている。それでもかろうじて歩く方向があっているのは、朝食のソーセージの焼ける匂いに誘われての事だろう。

ようやく席についたジークに、レイが声をかけた。

「ジーク、あなた今日は何したの？」

ジークは寝ぼけ眼で返事をする。

「ん……。ベットから出て……、階段に向かって歩いたら……、マグナム踏んでしもて……」

マクレガーがコーヒを吹き出した。

「おいおい、人の銃を踏みつけるってどういうことだよ」

しかしながら、マクレガーの抗議も、今のジークの耳には残念ながら届かないようだ。

「滑って転んで頭打って……、マグナムはどっか飛んでって……、壁にぶつかって暴発^{ほうはつ}して……、弾が頭の上をかすめて……」

ジークはそれだけつばやくと、テーブルの上に突っ伏した。レイが苦笑いしながら、マクレガーに目配せする。マクレガーも仕方なさそうに、にやりと笑ってコーヒを口に含んだ。

「ジークさん、起きてくださいよ。今日はお礼に、この前テレビで紹介したレストランに連れてってくれるって言うってたじゃないですかー！」

ナンシーが、ほかほかと湯気の立つスクランブルエッグを大皿に盛り付けながら、ジークに声をかける。

「お礼って？」

レイが不思議そうにナンシーに尋ねた。ナンシーは口をとがらせながら答える。

「一昨日の大仕事ですよ、ジャネットさんの。それでお手伝いしたんです」

「そうなの！？」

レイにとって、またしても初耳の事実だ。

「はい。」

一応監視カメラはつぶしておくけど、万が一アルバートの供述でジャネットの名前が出てきたら、罪にならないにしても国家物理学者の称号は間違いなく剥奪だ。その時のために、君に身代わりをやってもらって、アリバイを確保してもらいたいんだ、って言われまして。んで、あの時間帯を見計らってジャネットさんの知り合いの教授の所におしゃべりに行ったんです」

それを聞いたレイがコーヒーでむせた。

「ちよつと待つてよ。特殊メイクはジークがいるから大丈夫だけど、声も違うし、第一専門知識なんて……」

「ああ、その点は大丈夫や」

いつの間にか復活していたジークが、コーヒーをすすりながら口をはさむ。

「声色をまねるのは、ナンシーの得意技や。それにナンシーの親父さんを思いだしてみいな。な、大丈夫やろ？ 実際、面白かったらしいしな」

『まあ、そうやな。でも、俺の親父に比べたら、国家物理学者ってゆうてもあんまし大したことなかったなあ』

ナンシーが、ジークと同じ声でレイに笑いかける。レイとマクレガーは同時にため息をついた。

「んで、ナンシー。親父さんはどこ行ったんや？」

パンをほおばりながら、ジークが尋ねた。

「分かりません。昨日の夜まではいたんですが、今朝見たらいなくて……」

「さよか、また厄介事持ち帰られたらかなわんねんけどなあ」

ジークはぼんやりした様子でぼやく。朝の気だるげな食事のワンシーン。これだけは怪盗といえど、普通の人間と変わらないようだ。

「ところで、アルバートがどうなったか知ってるか？」

マクレガーがジークに声をかけた。ジークは無言でうなずき返す。

「お前のとったカセットテープが決め手になったらしいな。精密な声紋調査でもって、あれが作りもんやないって証明できたらしいで」

「本物に決まってるだろうが、俺がとったんだから。にしても、国家反逆罪で絞首刑か……。哀れな男だな」

「まったくや」

ジークはこんがりと焼けたソーセージにかぶりついた。

「ジャネットちゃん、これから大丈夫かしらね」

あつという間に食パン二枚を平らげたレイが、誰ともなしにつぶやく。しばしの間、沈黙が続き、やがてジークが口を開いた。

「あの子なら、大丈夫やろ。ああ見えて芯のしっかりしてる子や。これからもやっていけるやろうし、いつか世の人に役立つ発見をするんやろな」

言い終えて、ジークはぱんと両手を合わせた。

「じつつおさん、つと。」

せや、マツク。お前いつまでここにおるつもりや?」

「そうだな。あまり長居しては迷惑をかけるし、今日にでも向こうに帰るさ」

「さよか」

ジークはマクレガーの手に、黒光りするマグナムを押し付けた。

「こいつはやつぱりお前に返すわ。俺が持ってもしゃあないし、それもお前に使ってもらえる方が嬉しいやろ」

マクレガーは驚いた顔をジークに向ける。

「構わないのか? 俺はこいつで人を殺すかもしれないんだぞ?」

ジークはふつとやわらかい笑顔になった。

「かめへんよ。俺とお前の仲や、なにがあっても人の命をとるためにソイツの引き金を引けへんやろうって信頼しとるからな」

二人はしばらくの間、じっと顔を見合わせていたが、突然どちらともなしに吹き出した。

「ぶわはははっ！ だから、お前にはそのセリフ似合わへんって！」

「バカヤロ、それは俺のセリフだ。第一、俺は一言もしゃべってないじゃないか！」

その二人の間に、ナンシーが割って入る。

「はいはい、二人ともその辺で止めて、片付け手伝ってくださいな」

「はいはい」

ナンシーが、楽しげな音を立てながら洗い物を次々に片づけてゆく。と、その時。

「ジーク！ 依頼人さんよ！」

レイから声がかかった。レイに案内されてやってきたのは、ひょろりとした中年男性だった。

「初めまして、奥へどうぞ」

ジークが挨拶しながら、本棚の横のレバーを引く。本棚が真横にスライドし、ぽっかりと地下室につながる階段が現れる。その階段を降りきると、そこは怪盗のための応接室だった。

ジークは依頼人に席をすすめ、自分も相手の向かい側に腰を下ろ

した。

「改めて初めまして、ジーク＝ラントシュタイナーです」

「こちらこそ、初めまして。クレームンス＝ドッペルハウアーと申します。あの、こちらで盗みの依頼を受けてもらえると聞いたのですが……」

「もちろんですとも」

ジークの返答に、男の頬がゆるんだ。

「あのですね、実は家宝の宝石を取り返してほしいのです。詐欺にあっけしき、借金のカタに持って行かれてしまつて……。ヤツらはじめから狙っていたに違いありません。よろしく願いします！」

レイが心配そうな顔でジークを見つめる。一方のジークは自信たっぷりの表情だ。

「引き受けました。なに、大船に乗ったつもりで、安心していてくださいよ」

ぱあっと、依頼人の表情が明るくなる。しかし、レイはなにやら不満そうだ。

「ちょっと、ジーク。いつも言ってるじゃない、しっかり考えてから依頼受けないと、大変だよってね？ それを分かつてるの？」

ジークはレイに向き直る。表情は少しも変わっていない。

「安心せいや、レイ。俺を一体誰やと思つとるんや。天下の大泥棒『怪盗ジーク』なんやで？ 依頼を受けたら、百発百中、絶対に盗み出したるわ！」

《完》

終わりになき明日（後書き）

こんにちは、針井龍郎です。『怪盗ジーク―闇を駆ける者―』、なんとかかんとか完結できました！ 本当にやれやれです。

去年の八月に連載を開始してからちょうど半年くらいでしょうか。長いようで短いものでした。プロットなし、ほとんどノリだけで書き始めたこの作品ですが、実は連載をストップさせようかと本気で悩んだ時期がありました。第二話まで書いたあたりから、続きが出てこなくなったのです。このままゴミ箱行きかなとも思ったのですが。その辺の裏話なども含めて、小説作成秘話をブログで公開していきたいと思います！ 作者ページから、HOMEをクリックすればジャンプできます。『飛龍の寢床』です。ぜひ一度、お立ち寄りください！（宣伝、宣伝）

皆さんもお気づきの通り、この作品は伏線の回収がまだ終わっていません。その点も含めて、シリーズとして書いていけたらいいかなとも思っております。次回作も渾身の力をこめて書いていく次第でありますので、ぜひともよろしく願います！ 日々、進化し続ける私を、今後とも温かく見守っててください。

では、また次回作でお会いしましょう。以上、針井龍郎でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4607c/>

怪盗ジーク-闇を駆ける者-

2010年11月19日08時11分発行